

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

食の権利を守り おいしく たのしく レシピ集「いただきます！」 発刊！

大阪福祉事業財団創立70年を
記念し、連載「いただきます！」
がレシピ集になりました☆

定価
750円(税込)

児童、障害、高齢、全20施設、
57の自慢の一押しメニューを掲
載！ 全編カラーでかわいく、
みやすく、当財団の、食へのこ
だわりが詰まった1冊です。

語り合う 感じ合う 築き合う
70th
SINCE 1948



【ご注文・問合せ】

大阪福祉事業財団 TEL06-6931-0098 FAX06-6933-1699
<http://www.zaidanosaka.or.jp/>

生命尊重行政

老人医療費無料発祥の地、西和賀町(旧沢内村)を訪ねました



永遠に
いのちの灯を

「生命尊重こそ政治の基本」との信念のもと「雪と貧乏と病気」の三悪追放に命をかけた旧沢内村元村長の深澤晟雄ふかさわまさおの「精神とその業績」に学び、伝える深澤晟雄資料館の側に「いのちの灯」が建っています。この碑は、自らの命をかけて住民の生命を守った深澤村長への想いをこめた顕彰碑として、全国運動で建立されました。

(「特定非営利活動法人深澤晟雄の会」ホームページ引用)

住民の生命を守るために
私は命を賭けよう

深澤晟雄氏の遺訓

景柳 公



深澤村立病院（昭和34年）



深澤村立病院開院式（昭和34年）



深澤村立病院開院式（昭和34年）

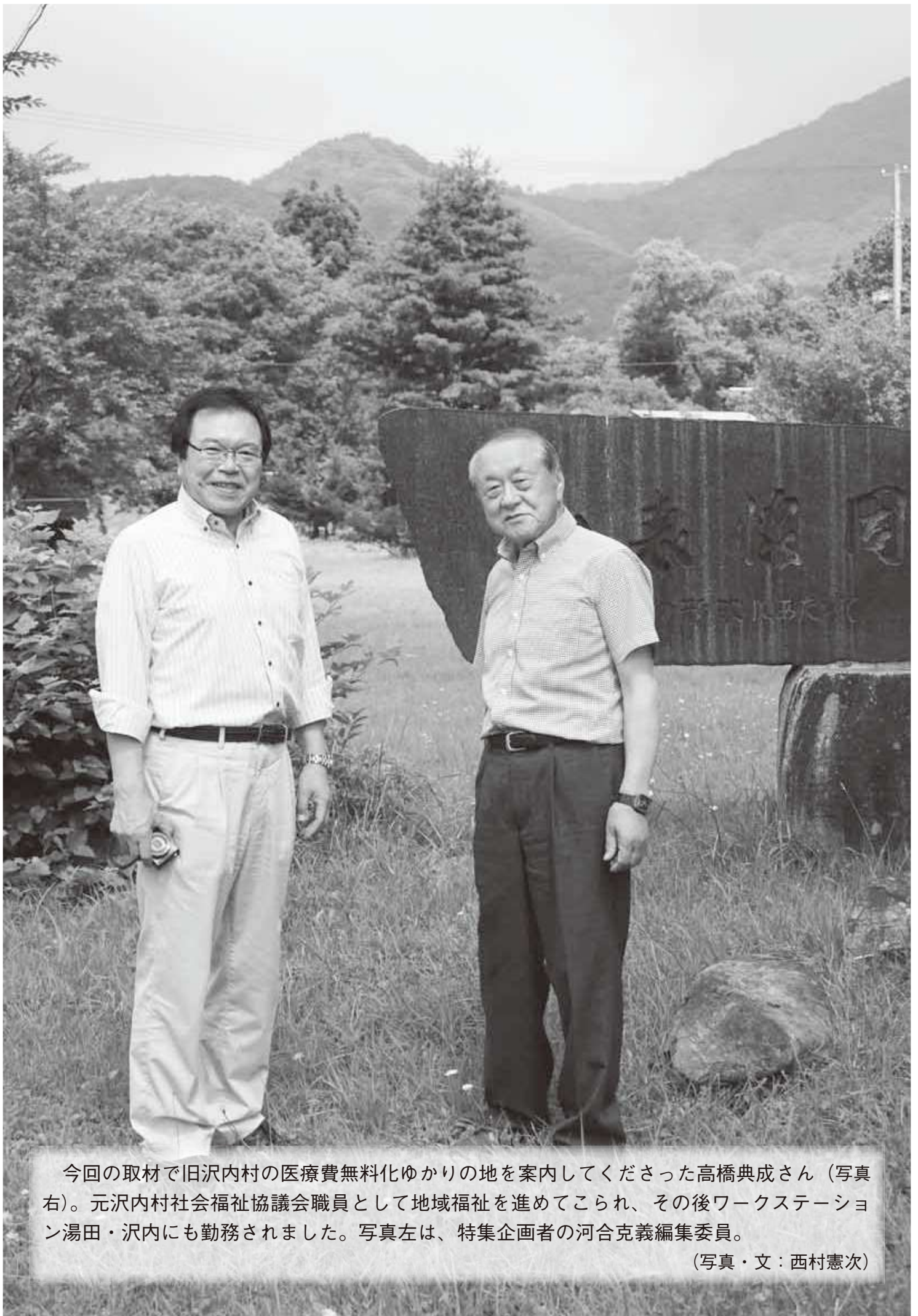
豪雪・貧困によって生きることが困難な旧沢内村で社会教育を重視して、住民の主体的な力量を作り上げてきた深澤村長。当時、国保窓口負担は五割、自己負担分を村が負担することに対して、国や県は法律違反だと迫りましたが、法律に違反したとしても、憲法二五条の生存権には違反していない、と医療費無料化を断行しました。深澤村長の遺訓。写真は、深澤晟雄資料館にて。



現在の町立西和賀さわうち病院。1954年（昭和29年）に国保直営沢内病院として開設され、1976年（昭和51年）沢内村国民健康保険沢内病院を経て、2014年（平成26年）10月に現在の場所に新築移転しました。（写真提供：病院事務長高橋光世さん）



西和賀雪国文化研究所。豪雪の町ではいかに雪を克服するかが課題でした。同研究所では、この雪と共存し、生活をしていくためにどう活用するかを研究しています。



今回の取材で旧沢内村の医療費無料化ゆかりの地を案内してくださった高橋典成さん（写真右）。元沢内村社会福祉協議会職員として地域福祉を進めてこられ、その後ワークステーション湯田・沢内にも勤務されました。写真左は、特集企画者の河合克義編集委員。

（写真・文：西村憲次）

●特集● 西和賀町の生命尊重行政の歩みと現在

西和賀町（岩手県）の生命尊重行政の歩みと現在	西村憲次	10
西和賀町の生命尊重行政60年	高橋典成	14
町立西和賀さわうち病院のいま	北村道彦	20

●トピックス●

何が本当に地域福祉で求められているのか		
膝をつき合わせて考えたい	豊田八郎	26
四方山話 満州開拓青少年義勇軍内原訓練所資料館	編集主幹	28
ハンセン病をとおして社会福祉を考える	高倉弘士	32
『「子どもの貧困」を問いなおす』		
合評会に参加してきました	高倉弘士	40
自分の頭で考え、自分のことばで語る、職場診断ができ、 その問題解決や事業推進の先頭に立つ職員を養成します		
障害者のくらしの場働く場を創り広げてきた埼玉の实践を中心に 全国障害者問題研究会第52回全国大会 埼玉		42 43
秘境の旅シリーズのおっちゃんたちが		
道東に国内留学する高校生に会った		44
第28回総合社会福祉研究所総会への事務局長報告	黒田孝彦	52

●連載●

社会福祉研究に人生あり！		
体験から研究へ	相澤與一	58
相談室の窓から		
大人の発達障害について考える（その1）	青木道忠	62
育つ風景 ある中学生へのエール	清水玲子	64
「助けて！」って言ってもええねんで！		
ギリギリのところで耐えつづける親と子どもたち	徳丸ゆき子	66
ひととしてあたりまえに生きたい		
直面する差別、ろうあ運動との出会い	清田 廣	68
映画案内		
湯を沸かすほどの熱い愛	吉村英夫	70
現代の貧困を訪ねて 今年の暑さと貧困	生田武志	72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート		
ペットの似顔絵を描くのじゃー！	ラッキー植松	74
ホームレスから日本をみれば	ありむら潜	76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ	77

●表紙の絵●
神門やす子



2018年度 京都社会福祉講座 開会にあたって

京都社会福祉講座 事務局
社会福祉法人七野会

みやもと
宮本

とたけし
武史さん

「今、何の仕事をしてるん？」と友人に聞かれると、以前は「介護の仕事やで」と返答していました。今、私はこう返答しています。「高齢者福祉の仕事にたずさわってるねん」。

何が違うの？ と思われる方もおられることでしょうか。聞いた側も、……で、結局何の仕事なん？ と疑問に思うことが多いようです。しかし興味を持ってもらえれば、チャンスです。「介護は……、で高齢者福祉っていうのは……」私がこう返答するようになったのは、この京都社会福祉講座を受講してからです。

京都社会福祉講座は、保育・障害・高齢の分野を超え、社会福祉の本質をひろい視点で考えるだけでなく、現在の社会福祉をとりまく環境での現状と課題について、より多面的にとらえることを主眼においた講座です。今年で一二回をかぞえる講座です。講師は各専門分野でご活躍の先生ばかりです。テーマや講座について、諸先輩のアドバイスをいただいたうえで、いざ、講師の依頼を、と相談させていただき、調整が難航することもありました。新体制となった事務局としては悩ましいところでしたが、それでも、この講座に期待をしてくださる各団体の多くの方を思い、準備を進めてまいりました。

さて、七野会が当講座にたずさわらせていただいているのは、元七野会理事長の故廣末利弥氏（二〇一五年二月没）の存在なしには語れません。法人の礎いしずえを築かれただけでなく、「福祉は買うものではない」とすべての人、誰もが平等に権利として福祉を享受できる社会をめざす



みやもと たけし

- 1977年 京都府生まれ。
2001年 社会福祉法人七野会入職。
ケアハウス、特養、グループホーム、老健（相談員）を経験。
2012年 生活支援総合センター姉小路・施設長に就任。
2016年 法人常務（現名、法人常勤理事）に就任（姉小路施設長兼務）、現在に至る。

ため、全国の仲間とともに、運動をつづけてこられました。領域を超えた仲間と手をたずさえ、社会福祉そのものの本質を学び、何を考え、何を大切に、行動していくことが重要なのか、を学ぶ機会として、本講座の中心になってこられました。七野会では、数年前までは、中堅職員研修との位置付けでしたが、現在は管理職や現場の中心を担う職員に対しても、積極的な参加を促しています。実際、本講座を受講した職員は、目の前の業務に追われていたところから、よりひろい視野をもって、目のまえの困難を乗り越えていくことにつながっています。また、他職員に、仕事の本質や社会福祉の仕事の魅力を伝えてくれる立場になってくれています。受講後、受講生自身の発言が変わったとの声も聞かれます。高齢分野では、介護をするところが仕事ととらえられがちですが、私たちがおこなっているのは、介護の仕事だけではなく、社会福祉そのものだと気付かせていただける講座、それが京都社会福祉講座だと思っています。

今後、私の仕事は「〈高齢者福祉〉にたずさわる仕事」から「〈社会福祉〉そのもの」になるのではと思っております。悩む毎日を通り過ぎておられる方も、改めて社会福祉を学び直したい方も、今一度〈社会福祉〉を見つめてみませんか？そして、将来、分野を超えて……ではなく、社会福祉の分野が一つとなり、様々な困難を共に乗り越えていけるよう、〈社会福祉の仲間〉が益々増えていくことを望んでいます。

住民と行政の協働で「豪雪、貧困、多病の山村」の 困難を克服した活動と伝統 旧沢内村のいま(現西和賀町)

戦後、地域医療保健福祉の実践的目標とされてきた二つの事例から、その史実と関係者に本誌編集委員の明治学院大学の河合克義、編集事務局の西村憲次の両名が伺い、いまを問いかけてみました。

二〇一〇年一月号、『二〇一〇年を高齢者福祉の新たな出発の年』のテーマに、上坪陽（かみつぼひかり、当時本誌編集委員、日本高齢者NGO会議議長）が、「沢内村奮戦記（一九八三年あけび書房発刊）の第三章沢内村から学ぶこと……草の根民主主義と住民本位の行政改革」を執筆。ここでは、上坪さんは、河合克義さんのインタビューで、沢内村から学ぶことは、住民自治とは何か、それは憲法で定められた地方自治を、戦後の歴史の拠点として率直に見直し、住民と自治体が一体になっていかに住民の健康と安全と福祉を守り育てたかを学ぶことだ、と指摘します。

「豪雪・貧困・多病の村で、ふかさわまさお深澤晟雄さん、さいとうたつお斎藤竜雄さん、おたそでん太田祖電さんの三人が村づくりをしていくためには、住民の人びとと一緒にものを考え、悩み、苦しみ、そして願いをもつことが

必要」と農民学校をつくったことから始まり、その後ばらばらになっていた婦人を組織し、婦人会をつくり、これが推進力となって「自分たちで自分たちの命を守る健康な組織的活動の母体」ができます。一方で役場の職員は公僕としての役割を発揮するために職員組合をつくります。一九五七年に深澤さんが村長、太田さんが教育長に、集落に出かけ、住民の生活要求並びに地域課題を収集します。岩手大学の協力の下、地域課題を分類し、①あまりにも雪が多すぎる②あまりにも貧困であること③あまりにも病人が多いこと。この三つが沢内村の僻地性を相乗的に築いていると。住民一体となって、この問題に取り組んでいくことが行政の基本である。これが乳児医療費無料化や老人医療費無料化を進める背景になり、一九七三年に国の制度としても実現しますが、八〇年代に入るとその流れが逆転します。住民を信頼し、生命と人間の尊厳を守る沢内村の哲学を今回の特集をとおして考えたいと思います。

さて、中央省庁の八割二七機関で障害者雇用が水増しされ、法律で定められた雇用率を、大きく下回っていました。国税庁では一〇〇〇人超えのマイナス、雇用率ゼロパーセント台が総務、法務、文部科学省など、一八機関におよびます。故意か理解不足によるものか、今回の調査では判断しきれないと厚労大臣。不誠実きわまりない。

(編集主幹)